コープ災害ボランティア ネットワークニュース

【第１２４号】２０２４年１月

東京都生活協同組合連合会
コープ災害ボランティア
ネットワーク幹事会
TEL：03－3383－7800

２０２４年がスタートしました。今回は昨年実施した「西東京で防災まち歩き」と「中野の地域の力を考えよう！」の活動をご報告します。スキルアップ講座も残すところ１講座となりました。今年もよろしくお願いいたします。

報告

スキルアップ講座 第２講　１１月２５日（土）

西東京で防災まち歩き

災害が起きた時に町がどのような状況になるか、命を守るためにどう行動するかを実践的に体験する防災まち歩き。いつもよりも広い目線で町を見て、感じて、気が付いたことや疑問を、いっしょに歩く人と話すことで視野を広げられます。

今回のまち歩きは、西東京市社会福祉協議会と災害や防災の市民活動団体である西東京レスキューバードが連携し、防災だけでなく町の歴史も学びながら歩きました。

２２名の参加者のうち、西東京の人は自分たちの町をより深く知り、それ以外の人は自分たちの町でもまち歩きで知りたくなる、今後につながる体験となりました。

西東京市田無駅北側の２．２キロのコースを５人ずつのグループで、１時間強歩きました。

滝島 俊さん

荘 雄一郎さん

CO災ボ小野代表幹事からごあいさつ

田無総合福祉センター（福祉避難所）に集合。町に出る前の予習として、田無近辺地方史研究会の滝島さんから「田無地形と田無用水」「江戸時代から続く田無の町と人々のくらし」についての講義と、西東京レスキューバード代表の荘さんから防災まち歩きのオリエンテーションでスタートしました。

田無小学校まで全員で歩き、避難所・防災倉庫としてどのような役割を担うのか説明を聞きました。

防災倉庫を開けていただき、中に何が備蓄されているかを確認。他にももう１か所倉庫があるとのこと。

田無用水は暗渠となり、北流は「やすらぎのこみち」、南流は「ふれあいのこみち」と名づけられ、遊歩道として残されています。

下田家水車小屋があった場所で、滝島さんが手作りの水車小屋の模型で説明。白いタイルの部分が田無用水の流れで、またぐ形で水車小屋がありました。

西武線のガードをくぐって、田無駅の南側へ。田無用水はこの石神井川に流れ込みました。この周辺が一番低く、改修前は頻繁に冠水したそうです。文化大橋に立ち西東京レスキューバードの森谷さんからお話を聴きながら地形を確認しました。

平和のシンボル「観音像の慰霊塔」1957 年4月に第２次世界大戦での米軍機による爆死した人や被災者を供養するために、被災地在住の海老沢太一氏が中心となり観音像の慰霊塔が建立されました。元は駅前にありましたが、総持寺に移転されたそうです。

明治４年に新しく田柄用水を分水した分岐点。

グループごとに自己紹介と振り返りを行い、発表し感想を共有しました。

参加者アンケート（抜粋）

「災害対策だけでなく、地域の良い所に重点を置いたまち歩きは、住む人にとって良いと思う」「田無の地名から想像はしていたが、地形からの説明で納得」「田無用水から当時の暮らしを知り、実際に歩いてみることで役立つものや、危ない場所が確認できた」「地理的条件、時代背景を学べたのは大変良かった。木造建築物、擁壁、万年塀などの老朽化が目立ち、危険な箇所が思った以上にあった」「西東京レスキューバードさんの存在を知らなかった。すばらしい取り組みをされている」「地域に密着した取り組みはとてもよい」「自宅近くでも歴史と防災の見方の両方で、防災のポイントを確認したい」　お疲れさまでした！

報告

スキルアップ講座 第３講　１２月１６日（土）
「災害ボランティア講座　中野の力を考えよう！」

スキルアップ講座第３講はコープ災害ボランティアネットワークと中野区社会福祉協議会が連携して開催しました。淑徳大学総合福祉学部社会福祉学科准教授の菅野道生さんのお話と進行により、中野区で活動するボランティア団体の上沢聡子さんと鎌田文子さんがパネラーとなり、活動団体の共通の課題である「自然災害への対策」をテーマに意見を交換しました。日ごろ地域で活動している立場や力をいかしてどう活動するか、平時からできること、災害時にできることを考えました。

阪神淡路大震災の年齢別死者数では、２０～２４歳の若者と高齢者が多く、救助された約３万人の約８割は近隣住民に助けられているため、大学生などは日常生活の中で周りの人から見られていないことが要因の一つだと思います。顔の見える関係づくりがいざという時、地域と命を守ることつながります。それには地域の伝統文化で人を結び付けたり、「面白そう」「楽しそう」な場をつくったり、そこから「また会いたい」と思える場づくりが大事です。

１つの事例として、「土鍋ネット」がありました。学生たちが「鍋やりたい」と場所を探し、公民館で始めたところに地域住民も参加。何年も続けたことでお互いが顔見知りになり、そこから学生が地域の活動に参加や支援を行うようになりました。ガチガチの「炊き出し」の活動よりも、気楽に参加できて干渉されない企画。「防災倉庫の炊き出しセットを使って練習しよう」程度の「やわらかい入口」が良いのではないでしょうか。地域防災のプログラムは色々ありますが、「災害時にできること」ではなく、「今、私たちにできること」をみんなで考えいっしょにやってみること、それを繰り返していくことにより、地域に住むみんなに優しい福祉コミュニティを作ることになります。

上沢聡子さんは、「赤ちゃんとママの防災講座」（２０１５年開始）主宰、防災士。高校時代に大阪で阪神大震災を経験し、東京で出産後「今、被災したら子どもを守れない」と奮起し、乳幼児親子向け防災を始められました。２０２０年に厚生労働省主催「第9回健康寿命をのばそう！アワード母子保健分野団体部門厚生労働大臣賞優秀賞」を受賞。本業でも乳幼児問題などをテーマに多数の執筆や監修で活躍されています。

災害で一番被害が大きくなる「冬の夕方１７時・自宅で夕食調理中」の条件で子どもはリビングにいると考え、「地震発生１２時間シミュレーション」で細かい課題の抽出と全体を把握します。なぜ乳幼児家庭なのか？は、地域のつながり、災害への対応力、人間関係づくりなどで親子が最も脆弱な時期だからです。現在は父親の参加も増加し、防災への意識は広がってきているそうです。さらに同じ世代同士だけでなく、違う世代や多様な人とのつながりを作り、わが子を守ることを一人で背負い込まないことが大事です。

「いのちと健康なかの JAPAN」は、２００８年から中野区の健康づくり事業で出会った個人や団体でネットワークを強め、「地域でつなげよう・つながろう」を推進し、食・運動・防災などで活動を継続しているボランティア団体です。メンバーは、栄養士・保健師・運動指導士・防災士・演劇集団などの多職種で構成され、鎌田文子さんは保健師さんです。

地域の防災訓練やイベントに参加し「自分たちでできることから始めよう」と活動を広げてこられました。事例では、「常備畜食材アンケート」（９１１人対象）を実施した成果をまとめて、アレルギーや塩分制限がある方が１３％、頻尿や便秘の不安がある方１０％などから、「災害時の食とトイレ」を備蓄食材で献立の工夫、トイレ問題、家具転倒劇などテーマに地域防災活動で取り組んでおられます。

ディスカッション

後半は１０分程度、会場では近くの席の４人のグループとなり、感想を出し合い講師やパネラーへの質問を考えました。また、質問に対してパネラーが答えるだけでなく参加者にも発言してもらいながら、「災害時にできることはなにか」を全体でディスカッションしました。

オンラインのグループでは参加者から、「日頃仕事で忙しく、災害時に何を準備するかがわからず情報を得たかった。たまたまこの講座を知った」と声があり、ローリングストックや備蓄品のアレンジレシピ（じゃがりこのポテトサラダなど）などの情報が提供され共有しました。

質問 ■企業とのコラボした活動はあるか？

上沢さんから「防災用品やベビー用品の企業と取り組んだ。企業との連携は、活動目的を尊重してくれる企業と進めたい。管理栄養士・大学の先生・学生、在宅ケアが必要な子どものためのサービス、幼稚園・保育園等も相性が良いと感じる」、鎌田さんから「介護施設の管理栄養士に地域の方に施設を知ってもらうために学習会を行った」、菅野先生から「社会的地域的貢献をミッションにしている企業や団体がある。生協も色々なことに取り組んでいる。連携できるとよいのでは」と提案がありました。

質問 ■つながりを作るコツは？

鎌田さんは「地域で色々な活動を行い、地域の人と顔見りになる」なる」、上沢さんは「大事なことは双方向でつながること。こんなことをしている、自分も参加できるということを地道に伝えること」と、コツコツ活動する大切さを話されました。

■菅野先生の提言

防災や災害をキーワードに地道に活動することが大事で、人がつながっている地域は災害にも強い地域となります。

第３講のアンケートでは、「たくさんの知識を得ることができた」「地域の繋がりが被災環境で生きるために、どれだけ大きな影響を与えるということを学べた。今後も地域の活動に参加して地域の人とのつながりを深めたい」「子育て中の母として、薬局勤務の医療人として、今まで知らなかったことに出会い、考える機会となった。薬局も地域活動が必須となっているので、災害時にどんなことが必要とされるのか継続的に学んでいきたい」など。地域でどう活動するか、自分事として学び考える講座となりました。

コラム by 小野清 幹事

今年度の新幹事となりました住宅生協職員理事の小野（第９期生）と申します。よろしくお願い致します。

さて、令和６年の新年早々に、能登半島地方を中心に石川県で最大震度７を観測しました。当日、私は、自宅にてテレビでサッカー観戦をしており、勝利監督のインタビューをしている時に画面が切り替わり、緊急地震速報になりました。その後、女性アナウンサーが「津波が来るので、逃げて！」「東日本大震災を思い出して下さい」と絶叫していました。また、画面では、聴覚障害の方にも伝えるように手話の方が映されていました。２０１１年の東日本大震災から情報の伝え方が進化していると感じました。しかし、私が住んでいるマンションには外国人の方がいて、特に首都圏での災害時の情報は正確に伝わるのか？と感じました。ＣＯ災ボの幹事としても地域社会の外国人を支援しなければと思います。思えば、昨年の１２月、東京都・日本財団主催のボランティア研修会に参加した講座では、「やさしい日本語」を学びました。例えば、避難所は、「みんな　逃げる　ところ」などです。

現在、日本には、在留外国人・観光目的で外国籍の方が多く見受けられます。ニュースでも能登半島で被災されている方に外国籍の方がいるとありました。私の住まいの近隣の中でも、さまざまな人（障害・高齢者・外国人等）が生活しています。今後、個人としても、能登半島地方地震の支援と共に、将来の首都圏の災害の「備え」を常にして行きたいと思います。

参考「やさしい日本語」
https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/multilingual/council/pdf/meeting_05/reference23.pdf